

三浦半島の爬虫類相

柴田敏隆*

Reptils of the Miura Peninsula

Toshi. SHIBATA*

(With 2 Plates)

爬虫類の棲息環境としての三浦半島

三浦半島は、ほぼ東経 139 度 40 分、北緯 35 度 10~20 分の間であり、北東から南西に細長い日本列島の丁度真中辺に当たるが、生物分布の上からみると、南北両系の生物の分布境界に位置する場所の一つといえよう。(例えば、東海沿岸線、尾池線、本州南岸線、Lewis Stejneger 線などと呼ばれる北緯 35 度 10 分の線が通り、またこれより僅か南に、Thomas 線〔北緯 35 度の線〕も通っている)。田中茂穂博士に依れば、三浦半島の近海は、日本近海魚類の分布区分による黒潮区の北限に当り、酒井恒博士は、蟹の分布でも、三浦半島は北方型種の南限、南方系種の北限に該当するという。

植物分布の方でも、年平均気温 14.5°C、年最低気温 -3.5°C の等温線に大略一致するハマオモトの分布境界線 (Crinum 線) が通り、ハマオモト、ハマボウなどの分布北限地域となっている。これらは冬期極めて温暖であることの例証の一つと考えられるが、実際に西浦 (相模湾岸) 地方では無霜地帯もあって、野菜や花卉の速成栽培が行なわれている。

年平均気温をみると、南部に 15.5°C、中部に 15.0°C、北部に 14.5°C の等温線が通り、神奈川県下では最高、関東地方では房総南端より僅かに低く、全国的には、東海、近畿、中部、瀬戸内海よりもやや高い。年間の気温の変動は、1 月最低、8 月最高で、風偏度は北寄の風が強いが、風力は西南系が卓越している。

降水量は冬少なく、夏多い太平洋型の降水量で、年平均では横須賀の 1,900 mm が最高、三浦市初声の 1,582 mm が最低の北東側が多い。

こうした気候の温暖性は、生物季節の動きにも明らかで、一月中にアカガエル、トウキョウサンショウウオの産卵を見、タンポポは夏季を除く周年開花し、サクラの開花、ツバメの渡来なども関東地方では房総と共に最も早い。

三浦半島は、海拔 200 m 位の比較的開析の進んだ地壘的山地と、その間に発達する低平な沖積地、それに南部にみられる海蝕台地からなる地形で、その基本的原始植生は、山地では、シイ、タブ、トベラ、ヤブニッケイなどの暖帯性照葉喬木林を主体として、林床には、イノデやリュウモンシダなどが発達し、低地ではヨシやハンノキを主体とする湿性の植生と、海岸をとりまく海浜植物群落に依って構成されるが、現在では、山地はほとんど人為の加わった二次林としての雑木林や杉林に、低地は、市街地が水田に変貌している。

このような自然的条件の具わった三浦半島は、比較的狭い割に、動植物の種類数、生息数が多く、従って爬虫類相も割に豊かで、本州に産する代表的な爬虫類は、一応全部記録されている。しかし

* 横須賀市博物館. Yokosuka City Museum.

ながら、昔は豊富であったこれら動植物も、近年は開発に依る著しい影響を受けて、年々急激に減少しつつあり、既に、当地から姿を消してしまった種類も少なくない。

三浦半島産爬虫類目録

カメ目	TESTUDINATA
ウミガメ科	Cheloniidae
アカウミガメ	<i>Caretta caretta</i> (LINNÉ)
オサガメ	<i>Dermochelys coriacea schlegelii</i> (GARMAN)
カメ科	Testudinidae
クサガメ	<i>Geoclemys reevesii</i> (GRAY)
イシガメ	<i>Clemmys japonica</i> (TEMM. et SCHL.)
スッポン科	Trionychidae
スッポン	<i>Trionyx sinensis japonicus</i> TEMM. et SCHL.
トカゲ目	SQUAMATA
トカゲ亜目	Lacertilia
ヤモリ科	Gekkonidae
ヤモリ	<i>Gekko japonicus</i> (DUMÉRIL et BIBRON)
トカゲ科	Scincidae
トカゲ	<i>Eumeces latiscutatus</i> (HALLOWELL)
カナヘビ科	Lacertidae
カナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i> (SCHLEGEL)
ヘビ亜目	Ophidia
ヘビ科	Colubridae
タカチホヘビ亜科	Xenoderminae
タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i> PETERS
ヘビ亜科	Colubrinae
シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i> (BOIÉ)
ジムグリ	<i>Elaphe conspicillata</i> (BOIÉ)
アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i> (BOIÉ)
シロマダラ	<i>Dinodon orientalis</i> (HILGENDORF)
ユウダ亜科	Natricinae
ヒバカリ	<i>Natrix vibakari</i> (BOIÉ)
ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i> (BOIÉ)
ウミヘビ科	Hydrophiidae
ウミヘビ亜科	Hydrophiinae
セグロウミヘビ	<i>Pelania platurus</i> (LINNÉ)
クサリヘビ科	Viperidae
マムシ亜科	Crotalinae
マムシ	<i>Agkistrodon halys</i> (PALLAS)

以上、2目(2亜目)9科(5亜科)17種

各種類棲息状況概況

アカウミガメ 相模湾の沖合で漁船に捕獲されたり、定置網に入ったりすることがしばしばある。筆者は 1952 年 4 月 24 日、横須賀市走水海岸、走水小学校下で、本種の死体が打上げられているのを記録したことがあり、その計測値は次の通りであった。

Length of Carapace	58 cm
Greatest width of Carapace	52 cm
Vertebral	5
Costal	{right 4 left 5

また、1949 年 7 月 14 日、観音崎灯台下の潮溜りで、デラ台風の折に打上げられたアカウミガメを飼育しているのを目撃した。1960 年 10 月 10 日、横須賀市馬堀町 3 丁目の海岸で、甲長 70 cm の本種の死体を、地元馬堀中学校科学部の諸君が拾得している。更に、昭和 15 年頃、横須賀市安浦港外で、海亀の稚亀を捕えたという話もあり、東京湾口、浦賀水道周辺にも棲息するらしい。意外に知られていないが、殆んど例年、夏季、鎌倉の海岸へ夜間産卵に上陸するようで、1960 年 8 月 4 日は七里ヶ浜で、1966 年 7 月 14 日には由比ヶ浜で体長 112 cm、体重 80 kg の本種がそれぞれ記録されている。城ヶ島の染羽彦十郎氏よりの書信によると、1961 年 7 月 26 日の払曉、三浦市城ヶ島の赤羽根海岸で、波打際を海へ降りていく大きな海亀を、天草とりの海女がみつけ、更に同年 8 月 28 日午前 9 時頃、同じく赤羽根海岸堂ヶ島附近の砂浜を 30 匹程の孵化したばかりの亀の子が、一直線に海へ這っていくのを数人の海女がみつけたとのことで、これは、同地では数十年ぶりといわれている。昭和の初め頃は、毎夏土用の頃、産卵して帰る亀に出会したとのことであるが、孵化した稚亀をみるのは、20 年間に 4~5 回とのことであるという。また城ヶ島では海亀は産卵前 4~5 日は、海岸近くの海中で様子をうかがい、産卵後しばらく、赤羽根の沖にいてもいわれている。因みに同地では、海亀の卵も肉も食用には供しない。この海亀とは、恐らくアカウミガメであろうと推察されるが、精確な種名はわからない。

神奈川県下では、三浦半島以外でも、湘南海岸や小田原方面で、しばしば、アカウミガメが産卵のために上陸するようで、1960 年 9 月 3 日小田原の酒匂川河口附近の海岸で、本種の孵化したばかりの稚亀を金田平氏等が採集している。

なお西村、原の両氏 (1967) は日本近海のアカウミガメ類が、*Caretta caretta* (LINNÉ) 及び *Lepidochelys olivacea* の二種が記録されるのを従来、学名和名共に著しく混乱しているのを指摘して、*Lepidochelys olivacea* の方にヒメウミガメの新称を与えてこれを整理されたが、三浦半島周辺のアカウミガメは何れも *Caretta caretta* である。

オサガメ 江の島水族館の広崎芳次氏に依ると、1958 年 5 月横須賀市佐島で、雌雄 2 頭のオサガメが捕獲され、現在その標本は同水族館に所蔵されている。1955 年 5 月 26 日付の朝日及び読売新聞によると、三浦市諸磯の大謀網に壘半壘大、体重約 80 貫 (300 kg) のオサガメがかかり、三浦市油壺の東京大学臨海実験所附属の水族館に入ったことが写真入りで報道されている。

また、石井光太郎氏 (1967) に依ると「弦斎の浦賀見聞記」——明治 25~26 年 (1892~1893) 頃の記述と言われる——中に、「浦賀の沖には 大きさ三間余の大亀居りて、しばしば水上に頭を現わす」とあるが、大きさから言ってオサガメであったかも知れない。

本種は、日本近海に比較的広く分布し、北は北海道まで及ぶが (西村, 1955) 佐渡沖の定置網にはしばしばかかるという。

三浦半島周辺には、このほかアオウミガメ、タイマイの回游が予想されるが、アオウミガメにつ

いては、明確な記録はなく、タイマイについては、広崎氏によれば、10年位以前、横須賀市佐島でとれたことがあるという。

クサガメ 三浦半島内各地の住宅地、近郊の水辺で本種を目撃し、あるいは子供達が採集したりするが、本来 Endemic な分布であるかについては疑わしい。愛翫動物として金魚屋などから買われたものが逃げだして野生化することは充分考えられることである。しばしば縁甲板や臀甲板に穴をあけられたものをみるが、ここに紐や針金を通してつながれていたらしい。その穴の外縁が切れているのが多い。全く野生の状態で棲息するインガメの棲息環境で、本種を認めないのは、本来土着していないためか、すみわけによるものであろうか、恐らくは前者に依るものであろう。

三浦半島基部の横浜市金沢区泥亀町に1950年代まで、泥亀新田と呼ばれる広大な葦原と蓮田があったが、当時、地元六浦中学校の教諭で、この地域の自然を調査された村上司郎氏に依れば、この泥亀新田には、地名の通り少数のインガメと多数のクサガメが棲息し、1956年前後2~3年の間に30匹程捕獲したとのこと、甲長5cm位の小亀もみられるので、クサガメの当地域での蕃殖は確実のようだとしている。1955年6月、卵を採集したが、インガメかクサガメか確認に至らなかったという。村上氏による泥亀新田産のクサガメの計測値を示すと次の通りである。

No.	Total Length	Length of Carapace	Greatest Width of Carapace	Hight (cm)
1	34.0	20.5	13.3	9.3
2	32.1	12.0	7.6	5.0
3	16.0	8.0	6.0	3.4
4	15.6	8.0	6.0	4.0
5	—	14.2	9.5	5.6

(Murakami 1956)

この泥亀新田は、その後1960年頃より埋立てられて全くの市街地と化してしまったので、クサガメもインガメも絶滅してしまった。当時は、三浦半島で最大のクサガメ棲息地であった。

インガメ クサガメ同様、人家周辺で明らかに飼われていたものが逃げたと思われる個体をみかけることも多いが、横須賀市野比^{のび}大作の反の田の池、同長沢の四ツ田の池、武山東麓、長沢^{のり}の入の杉釜の池などには、完全に野生状態で棲息する。春秋には池畔の倒木や岸辺の地上、あるいはタチヤナギの木の枝などに登って日光浴をしているが、大きな個体は人間の接近をいち早く感知して水中へ潜行するが、その動作はすこぶる速い。杉釜の池でのインガメの初認は、1960年は3月25日で、別に2個の死体をみているが、例年は4月に入ってから出現を見ている。同じ場所での終認は1951年12月2日という極めて遅い記録がある。

スッポン 1957年7月20日、鎌倉市の滑川畔で大きなスッポンがとれたことがあった。採集者は鎌倉市立第二小学校6年生金井忍君で、甲長30cm、甲幅24cm、体重約5.6kgあったという。これは恐らく、かつて薬用に売られていたのが逃げ出したものと考えられ、Endemicな棲息とは認め難い。戦前鎌倉八幡宮三の鳥居前東側に、薬用のスッポンを売買する店があった。現在でも八幡宮境内の源平池にスッポンの姿をみることがあるという。三浦半島には、このほかの場所でのスッポンの記録はない。

ヤモリ 三浦半島でのヤモリの記録は極めて少なく、半島基部の鎌倉市内に少数常棲するだけである。横須賀以南では、戦前、横須賀市公郷町に棲息していたという話があったが、確実な記録としては、1961年2月16日に、横須賀市深田台で越冬中の2個体が採集されただけである。鎌倉市内では、大町の大宝寺周辺に棲息し、夜間街燈に飛来する虫を待ちかまえているのを目撃するが、この場合1967年8月24日夜の観察では、白熱電燈の傍には寄るが、螢光燈の傍、あるいはその上に乗る個体はなかった。

トカゲ 半島内各所に極めて普通で、春は3月下旬から出現する。しかし、近年は都市開発などの影響を受けて、特に棲息環境としての石垣がコンクリート壁にかわり、また石積みの際も、セメントで目地をつめてしまう工法が多いので、年々激減の一途を辿っている。横須賀市の海上2kmの東京湾上に浮ぶ猿島には、比較の数多く棲息する。当地方の人々は本種を指すと、その指が腐るといって拳若しくは指先を曲げて指す風習があった。

カナヘビ トカゲ同様1950年頃までは饒産したものであったが、近年は激減した。棲息域である草地、野原の消滅と共に殺虫剤の乱用による食餌動物の減少もその大きな一因と考えられる。当地方の子供はカセクサなどの花柄を用いて括りわなを作り、これをカナヘビの首にひっかけて捕える遊びをしたが、今はそれもみられなくなった。

1955年の初認は3月27日、1961年は3月7日、1962年は3月25日、終認は1959年には10月23日、1962年は10月16日であった。

タカチホヘビ 三浦半島でタカチホヘビが初めて記録されたのは1950年6月23日で、当時、横須賀市立坂本中学校生徒の千葉善雄君が市内汐入町3丁目58番地の自宅附近で捕えた体長37.7cmの個体がそれである。続いて、同年6月26日には横須賀市吉倉町にて、7月1日に汐入町3丁目47、7月20日に汐入町3丁目241、10月に東辺見町1丁目82番地と続々記録されるようになった。これをみても本種は従来兎角稀少視されていたが決してそうでなくて、一般に気づかれなかつただけである。三浦半島では鎌倉、横須賀市内、久里浜、馬堀などで採集されるが、半島南部の三浦市からの記録はまだない。

横須賀市辺見町では、海拔10m以下、海岸線より50m以内の場所で採集され、また庭の落葉の堆積の下や、溝の近くなど陰湿な場所から発見されているので、必ずしも深山幽谷に棲息するものと限らない。特に横須賀市内の辺見、坂本、汐入地域には多く、その観察例数は、むしろヒバカリより多いくらいである。1959年10月23日、横須賀市田浦町3丁目55、市立田浦小学校裏の山で寺島浩一氏が、北側斜面の藓類の群落をはがした折にその下にいたのを採集した個体は、♀の成体であつたが、全長495mmあり、現在のところ日本で最も大きな個体である。(Fig. 5)

1961年9月2日夜、筆者は逗子市神武寺山の山道を横断中の本種を観察したが、飼育下でもその習性は全く夜行性で、しかも良く地中に潜ろうとする。シロマダラ同様、夜間、自動車などに軋殺された死体を朝方道路上にみかけることは多い。筆者の剖検ではミミズをたべている個体があつたが、四籠正夫氏はクガビルもたべるといふ。しかし、飼育下では何れの個体も全然餌をとらなかつた。

三浦半島のタカチホヘビについては、1961年、三浦高等学校の赤穂弊也氏と当時同校生物部員であつた鈴木満君の両氏が、第9回県下学生生理科研究発表会の席上で「タカチホヘビについて」と題して発表してその分布や生態を紹介し、その後、湘南生物研究会会報にもNo. 123及びNo. 127に掲載されているが、これらのデータはほとんど全部1950～1955年にかけての筆者の調査による知見を、出所を明らかにせずして用いたものである。

ヤマカガシ 半島内の山野にごく普通で、その数も多い。水田の周辺などに多いが、山地の草むらでもみかける。本種はしばしば全長130cmにも達する巨大な個体をみるが、三浦半島では、そのような大きな個体はみかけず、せいぜい1m以下である。1956年3月28日、著者は、横須賀市岩戸の山間の水田で本種がノスリに襲われて捕食されるのを目撃した。また1960年8月、著者は鎌倉市大町の水田で、1m近い本種が突如著者の足もと1m近くの草むらから身体の前部1/3ほどを直立させコブラの類のように肋骨をひろげて威かくの姿勢と思われる姿勢をするのを観察した。この際、著者が移動すると、常にその方向に背面を向けるように身体を動かしたが、ほんの少時で、この姿勢をやめ、するすると草中にかくれた。1955年夏には横須賀市内川新田の

平作川畔で、対岸の葦の間から幅 3 m ほどの流れを泳いできた中型のヤマカガシが、こちらの岸辺につくと、水中に口をさし入れて水を飲み、終ると葦の茎に首のつけねをこすりつけて、しまいには仰臥して、丁度犬や猫が地面に仰向けにねて、「かゆいかゆい」をするような動作をするのを観察している。飼育下のヤマカガシはしばしば仰臥する。深田祝氏 (1961) はこれを一種の防禦姿勢であるとされるが、前記の野外での観察例などは、むしろ快適あるいは喜悦を表現する動作のようにみえるものであった。

シマヘビ 半島内の山地に普通であるが、その数はアオダイショウやヤマカガシに比べて多くない。トカゲを捕食していることが多い。当地での初認はそれぞれ、1946年4月27日、1955年4月26日、1964年4月15日、終認は、1959年10月28日の例がある。

ジムグリ 当地では比較的数少ない種類である。1955年5月21日、大楠山の頂上附近で採集した個体は全長 865 cm の♂であった。なお当地方で広くヂモグリと俗称するのは本種でなくて、ヒバカリを指している。1954年11月4日という終認記録がある。

アオダイショウ 三浦半島の至る処に数多く棲息する。戦前には人家の周辺にもごくふつうで、その大きな個体は「主」と称して大切にされる習慣があった。1953年5月10日、横須賀市大楠山で採集した♀成体は全長 180 cm あり、当地方で最大の記録である。(Fig. 6) 体長 50 cm~1 m 位の個体は野鳥のヒナや卵を捕食することが多い。当地方での初認は、1948年4月4日、1955年3月26日、1963年4月21日、終認は1959年10月11日の各記録がある。

シロマダラ 三浦半島では、個体数は多くないが、極めて稀というほどでなく、採集の頻度はむしろジムグリより高い。石塊の間やコンクリートブロックの下などに棲んでいて、夜間トカゲを襲って捕食する。夜間自動車に軋殺された死体を路上にみかけることが多い。著者は飼育中の本種が、タカチホヘビの胴に噛みついて放さなかった例を観察している。金田平氏は1966年11月23日に逗子市新宿で本種を目撃しているが、1954年は10月24日、1958年は11月8日が終認の記録であった。本種を「弁天蝮」と称して焼酎に漬ける薬用に供する人もいる。

ヒバカリ 当地方では一般にヂモグリと俗称するが、ヂモグリとは混同していない。戦前には非常に多く、住宅地の庭先などで極めて普通にみかけ、郊外の水田や小流の畔などにふだんに棲息した。しかし、最近は激減して、むしろタカチホヘビよりも珍らしいほどになってしまった。それでも6月頃の雨の夜など、水田に集まって蝌蚪や幼蛙を捕食するのをしばしばみかける。また、雨天の日中、庭の池などに入り、水中を潜行してキンギョを捕食したり、池畔から水面に浮ぶキンギョをねらったりすることがある。筆者は本種が太いミズズを捕食するのを目撃したことがある。1951年には11月22日という大変遅い記録がある。

セグロウミヘビ 三浦市油壺の東京大学臨海実験所附属の水族館の所蔵標本に、本種があり、諸磯海岸にて漂着死体を拾得したとあるので、実験所に照会したが、採集年月日は不明とのことであった。江の島水族館の広崎芳次氏のご教示によると1952年9月19日、江の島沖で採集した本種を、水族館で飼育したことがあるという。

三浦半島の近海には、黒潮によってエラブウミヘビやクロガシラウミヘビ、あるいはマダラウミヘビなどが北上するといわれるが当地での明確な採集記録はない。

マムシ 半島内随所に棲息し、最高峯の大楠山(海拔 242 m) 山頂附近のような内陸部や、海岸の岩礁上で目撃する例もあるようにその棲息域は広い。当地方のマムシは俗に三浦蝮といって薬効が高いとされ、1950年頃までは、毎年秋 9~10 月頃に、久里浜から下浦方面へマムシ捕りがきて一シーズンに数万円に及ぶ収益をあげたといわれる。実際にその棲息数は特に多いとも言えないようであるが、本種による咬傷事故は当地方でも毎年 1~2 件は必ずといって良いくらい報道されている。1957年5月19日朝、逗子市久木で7才の男児がマムシに咬まれて翌日の夜に死亡す

るという事故があった。

当地での初認は、1962年4月22日(小川均氏観察)同じく終認は1962年10月2日(逗子にて五十嵐猛氏)、1967年10月29日(大谷茂氏観察)などの記録がある。

謝 辞

小稿を草するに当っては、下記の各位から、御指導、御教示、資料や記録の提供を頂いた。即ち海亀及び海蛇の記録について御教示下さった江の島水族館飼育課長広崎芳次博士、海亀の産卵について詳細な書信を寄せられた三浦市城ヶ島の染羽彦十郎氏、クサガメに関するデータの引用を許された横浜市立戸塚高校教諭村上郎氏、マムシの咬傷事例について御教示を頂いた逗子市立久木小学校教諭真壁英夫氏、常に筆者と調査に同行され協力を惜しまれなかった県立鎌倉高校教諭金田平氏、貴重な写真を貸与下さった横須賀市立馬堀中学教諭寺島浩一氏、日本の爬虫類全般について常に有益な助言や御教示を下さり、特に英文の校閲を頂いた畏友五里主リチャード神父(育英学園教諭及び日本爬虫両生類学会幹事でもあられる)調査の便宜を与えられた著者の上司横須賀市博物館長羽根田弥太博士の皆様方である。ここに芳名を記してあつく御礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 大後美保・鈴木雄次 1947 日本生物季節論 東京・北隆館. 217 pp.
 Fukada, H. 1961 Peculiar Habits of the Japanese Snake *Natrix t. tigrina* (BOIE) Bull. Kyoto Gakugei Univ. Ser. B. (18): 13-16.
 Goris, R. 1966 日本の爬虫類 東京・小学館. 127 pp.
 中原孫吉 1942 日本の動物季節 朝日新選書 6. 230 pp.
 中村健児・上野俊一 1963 原色日本両生爬虫類図鑑 大阪・保育社. 214 pp.
 Nishimura, S. 1965 The Zoogeographical Aspects of the Japan Sea Part 1 Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 13 (1): 35-79.
 ———— 1967 The Loggerhead Turtles in Japan and Neighboring Waters (TESTUDINATA and CHELONIIDAE) Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 15 (1): 19-35.
 西村三郎 1967 アカウミガメとヒメウミガメ 南紀生物 9 (1): 4-8.
 西村三郎・原 幸治 1967 日本海における *Caretta* と *Lepidochelys* (カメ目: ウミガメ科) 爬虫類学雑誌 2 (3): 31-35.
 柴田敏隆 1960 三浦半島の動物 かながわ文化財 (19): 14-18.
 Shibata, T. 1961 Some Observation on a rare Japanese Snake *Dindon Orientale* Sci. Rep. Yokosuka C. Mus., (6): 64-65.
 清水大典 1962 タカチホヘビ 置賜新博物資料(その3) つち団子 (3): 6-12.
 赤穂敬也・鈴木 満 1956 タカチホヘビについて FIELD and LABORATORY (127): 4-7 (謄写印刷)
 村上郎 1956 金沢区泥亀新田の生物研究横浜市立六浦中学校 87 pp. (謄写印刷)

Résumé

The Miura Peninsula is located at the center of the island of Honshu, but to the Black Current is warm in winter and is inhabited by many animals pertaining to both northern and southern types.

There are 17 species of reptils representing 9 families:

Notes:

The loggerhead, *Caretta caretta* (LINNÉ) breeds on the beaches of Kamakura and Jogashima isl., during the summer, but this fact is almost unknown popularly.

The ishi-game, *Clemmys japonica* (TEMMINCK et SCHLEGEL), is found in paddy reservoirs. Reeve's turtle, *Geoclemmys reevesii* (GRAY), is often found, but probably most of the specimens are pots which have been released. It doubtful whether it occurs naturally.

The gecko, *Gekko japonicus* (DUMERIL), is quite numerous in Kamakura city but it is rare in Yokosuka city, and not recorded from the southern part of the peninsula.

Of the snakes, the aodaisho, *Elaphe climacophora* (BOIE), and the yamakagashi, *Rhabdophis tigrina tigrina* (BOIE), are most frequently seen. The shima-hebi, *Elaphe quadrivirgata* (BOIÉ), is next frequency, and the jimuguri, *Elaphe conspicillata* (BOIÉ), is rare.

The hibakari, *Natrix vibakari* (BOIE), used to be quite numerous, but because of land development and the use of insecticides it has become scarce. The takachiho-hebi, *Achalinus spinalis* (PETERS), and the shiromadara, *Dindon orientalis* (HILGENDORF), which are scarce in other place in Japan, are frequently encountered here. In particular the takachiho-hebi has been recorded below 10 m above sea level, and less than 50 m from the shore. The mamushi, *Agkistrodon halys* (PALLAS), used to be frequently seen, but now it is quite rare. Mamushi from Miura used to be much esteemed by snake dealers.

The yellow-bellied sea-snake, *Pelamis platurus* (LINNÉ) was recorded once from Sagami Bay. The soft-shelled turtle, *Trionyx sinensis japonicus* TEMMINCK et SCHLEGEL, that was collected from the Nameri River in Kamakura city was an specimen, and is not endemic to the area.



Fig. 2. 日なたぼっこしながらあくびをするクサガメ, 本館附属自然教育園にて
A *Geoclemys reevesii*, Yawning.

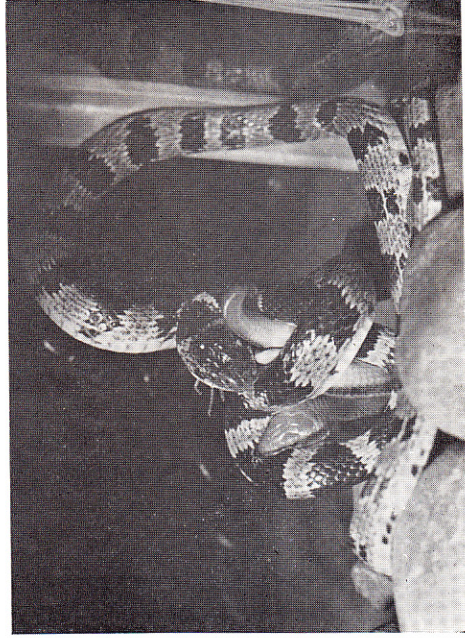


Fig. 4. 飼育箱内でトカゲを襲うシロモダラ
A *Dinodon orientale* attacks *Eumeces latiscutatus* in the Terrarium.

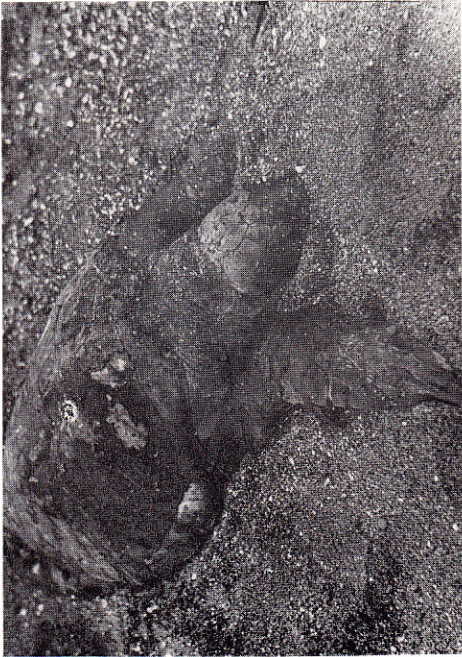


Fig. 1. 横須賀市走水海岸に打上げられたアカウミガメの死体
A Corpse of *Caretta caretta*, thrown up on the shore of Hashirimizu Beach, Yokosuka.

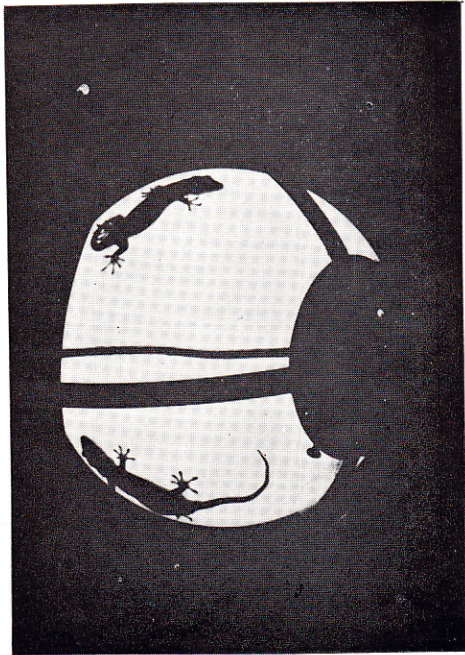


Fig. 3 街灯にとまって餌を求めめるヤモリ
Two Geckos *Gekko japonicus* feeding on a Street-Lamp at Kamakura
(寺島浩一氏撮影)



Fig. 6. 三浦半島で最大のアオダイショウ Total length 1800 mm, ホオジロのヒナを4羽飲んでいた。

The Longest *Elaphe climacophora* in Miura Peninsula Swallowed 4 chickens of *Emberiza cioides*.



Fig. 8. シュレーゲルアオガエルを襲うシマヘビの幼蛇
A young *Elaphe quadrivirgata constricts Rhacophorus schlegelii*
(金田平氏撮影)

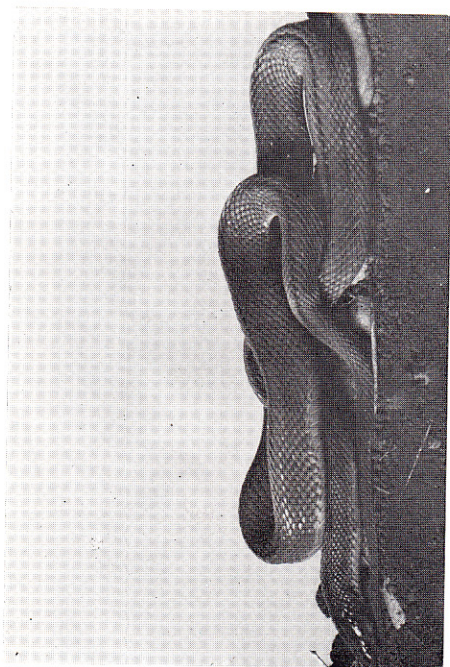


Fig. 5. 日本で最大のタカチホヘビ。♀ ad. Total Length 495 mm.

The Largest *Achalina spinalis* in Japan.



Fig. 7. マムシ

Agkistrodon halys